

B. R. Myers 著

North Korea's Juche Myth

Busan: Sthele Press / 2015 年 / 289p. / \$18.95



バラシュ・サロントイ (訳=河辺一郎)

本書は北朝鮮の文化、イデオロギーそしてプロパガンダを研究するブラיאーン・B・マイアースの最新刊で、北朝鮮の公的な教義である「主体思想」(subject thought)を、その知的な内実と実際の政治的な用例の両面から批判的に再検討したものである。著者は、公開された旧ソ連圏の報告書及び一〇〇点以上に及ぶ朝鮮語の北朝鮮の出版物を含む広範な一時及び二次資料に基づきつつ、言い古された言説が陥ってきた誤謬を意識的に避け、時系列で問題を整理することにより、「主体」プロパガンダの歴史の変遷のそれぞれの時期区分を注意深くたどる。そして、北朝鮮の政治的言説におけるこの言葉の広範な使用が一般的に指摘されるよりも後から始まったと考えられることを裏づける。キム・イルソン(金日成)の理論的な言説は一九三〇年代に為されていたと推定されていたが、マイアースは一九七〇年代に作り上げられたものと指摘し、「主体」を確立するための最初の継続的な試みは、一九五五年一月二二日のキムの有名な「主体演説」

〔訳注〕「思想的研究における教条主義及び形式主義の除去と「主体」の構築」のわずか一年後になされたことを明らかにしている。そしてこのような観察に基づき、彼は、明快に定義づけられた教義としての「主体思想」の登場は、北朝鮮独自の政治的方向性の形成よりも前ではなく後であり、このため、「主体思想」が政治的方向性の形成を導く影響を与えないことはなかったと、論理的に結論づける。さらに文書史料及び回想録を通じて、キム・イルソンがこの教義の形成に広く関与したのでも、深く検討することに関心を持っていたのでもないことを示す説得力のある証拠を、マイアースは提示している。

「主体」神話の歴史は様々な矛盾を抱えているが、北朝鮮政府が隠蔽している。これが公開されることが切望されるが、マイアースはその神話に、強い口調で、そしてしばしば皮相的に反論する。その背景には、主体思想に関するこれらのねじれが特に外国人研究者の著作に入り込む場合には、他の場合以上に修正し

なければならぬと、彼が考えることがある。北朝鮮外交における「主体思想」の重要性に対する過大評価が、各国の政策決定者をミスリードしかねないためである。そのため著者は、関連する外国の学術的出版が事実に関して不正確な記述を行っていることを指摘する。例えば彼は、言葉としての「主体」の語源を、一般的な解釈である「自立」(self-reliance)が不明確であることを示しつつ、ドイツ語の哲学用語である *Subjekt* の日本語訳である「主体」に求める。ただし著者は、北朝鮮を支配する言説に反論しようとするために、特に日本の植民地支配と「内鮮一体」政策によるトラウマを軽視すると同時に、同時期のソ連の政策との類似性を強調しがちである。このため、せっかくなの本書の論争的な側面をやや損なっていると評者には思われる。

キム・イルソンの「主体演説」は、マルクス・レーニン主義に取って代わろうと強く志向する新たなイデオロギーを表明したとする見解があるが、マイアースはキム・イルソンの「主体演説」の文

言を緻密に分析し、説得力のある反論を行っている。彼が指摘するように、「主体」の使用は、ソ連と中国のプロパガンダから借りた言葉を織り合わせたものである(四七頁)。「主体」の政治的な使用を唱道したのはキム・イルソンよりもむしろ延安の朝鮮族指導者キム・チャンマン(金昌満)とする見解があるが、これに対してマイアースは、キム・チャンマンは「プロレタリア国際主義」に基づくかの如く提示しており、彼の「演説は全体的に辻褄があわず、はつきりと中国の影響がうかがえる(一五三頁)」としている。

主体演説の「ブロック経済主義者」的な側面について、マイアースは、「事実上は、民族的な伝統における差し障りのないプライドというもの以上に、当時の東側ブロックにおける標準にやや近い」(五四頁)と分析しているが、私の解釈はやや異なる。私の見解では、キムはソ連の疑いを避けて、モスクワの支持を、ソビエトにおける朝鮮人のライバルから自分集めるために、ソビエトに触発されたような言葉の中に彼のメッセージを

隠したと思う。マイアースが指摘しているように、この独裁者はこの目的を達成した。とはいえ、この演説のある種の面は、同時代の東欧プロパガンダから派生しているが、ソ連が支配する東ヨーロッパの体制が「進歩的」な民族伝統を伸ばすことを呼びかける中で、彼らはこのようなプロパガンダを主に反共勢力に対抗するために利用したのである。キムも、演説の後半で韓国におけるピョンヤンの政治的影響の拡大への関心を表明したように。一方、一九六〇年代以前の東ヨーロッパにおいて、民族アイデンティティの代わりにソ連の習慣を推進したことを理由に攻撃された、党内闘争の犠牲者は知られていない。逆に、ソ連からの追放者に対する非協力や追放者を反ソ分子として扱うことが主流だった。

ただし、マイアースは「主体」の政治的な使用を文化ナショナリズム等から注意深く区別している。彼は、一九五五年から一九六〇年の間に、二つの現象の間には完全ではないが部分的な重複があるが、文化ナショナリズムが政治面よりも

はつきりと表明されていることを指摘している。またマイアースは、一九五九年より後に主体プロパガンダが台頭したことを、指導者が北朝鮮の経済的成果を誇り、これを韓国世論に宣伝しようと力を入れたことに原因を求めているが、私は、中ソ対立の影響から北朝鮮を保護しようとするキム・イルソンの意図も、おそらくこの新たな傾向に影響を与えたとと思う。こうした事情が重要な役割を果たしたことは確かだが、主体プロパガンダの最初のピークが、反事大主義キャンペーンとともに一九六〇年後半から六一年初頭に起きたためである。ただし、主体プロパガンダは大幅な変動を続けた。一九六二〜六四年の間は部分的に中国と北朝鮮の友好関係を強調する演出が強まったが、一九六五年にはソ連と北朝鮮の関係が一時的に改善したことにより、朝鮮労働党の指導者は主体プロパガンダを縮小した。

キム・イルソンが一九六五年四月一四日にジャカルタで行った演説（一般には、主体の発展において第二の里程

標となったと認識されている）を分析して、マイアースは、これが、ピョンヤンが「外見上もモスクワと対立するように自らを再編しない」（九一頁）ことで中国を安心させるキムの意向に強く影響を受けたと、説得力のある主張を行う。事実、この演説は、「現代的修正主義」及び「国際的分業」（例えば COMECON）をめぐる、キムが一九五〇年半ばに進めた集中化と重工業化を批判した国内外の「修正主義者」を非難した。こうした論難はモスクワの立場よりも北京にはるかに共通している。この点に関してマイアースは「東側の基準に照らしても、キムは特に大胆なことは言わなかった」（九三頁）と後述するが、彼がそれにしたって示している見解と比べると、これはやや精度が低いように思われる。

一九六七〜六九年に労働党内部が粛正されるが、この後、主体思想はキム・イルソンの個人崇拜の主要な（しかし支配的ではない）要素となり、海外への拡大を強めた。マイアースは、この攻撃的なプロパガンダを、ピョンヤンの外交戦略

の文脈に置くが、これは適切である。北朝鮮は韓国の孤立化を決意し、主体思想を非共産圏の人々にとって受け入れやすいようにするために、キム・イルソンを主体思想の創始者とすることを模索するのである。なぜ、このような事情がキムに主体思想の「人間中心」版の公表に（まず日本人ジャーナリストに、そして全ての人々に）導いたのか、本書は説得力のある説明を行う。北朝鮮の、日本と非共産圏の人々の幅広い支持を得るための準備は、台湾の国連追放を実現するために中国が行った世界的な外交努力と共通しており、キムのカルトの新たな側面の一部は、中国の毛沢東主義者の行動に直接影響を受けたように思われる。ただし、マイアースは、毛沢東思想に比べて主体思想の方が、最高指導者の著作の役割が小さいことを強調し、主体思想と毛沢東思想の違いに注意を向けているが（一一三、一四九頁）。

マイアースは、「主体思想が韓国のナシヨナリズムと同じであるという西洋の仮説とは逆に、これは基本的に、事実上

のイデオロギーを外部から隠すためか、あるいは少なくとも、自主独立のような全ての国が認める信条のように装うように考えられ、公式化された」（一二二頁）と主張する。確かに、主体思想の曖昧さと流動性は、多様な非同盟諸国と共通した基盤の上に立っているとみなすことができるように、そして「プロレタリア国際主義」への関与を減じたり、強調したりできるように、異なる事象を異なる人々に語るための、朝鮮労働党指導者の好みに全面的に従っている。ただし、「モスクワと北京は……キムがマルクス＝レーニン主義から迷い出ようとはしていないと知る必要があった」（一二二頁）と、北朝鮮が共産主義の同盟国のイデオロギーと共通したものに見えるように主体思想を創出したと言っているのは、部分的に不正確である。事実、主体思想が普遍的に受け入れられるように創出されたとする考えは、北朝鮮民族主義それ自体よりもソ連と北朝鮮の間に摩擦を引き起こした。一九七〇年代を通じて、労働党指導者は、ソ連と協力する国の共産党を

拒絶するためにしばしば主体思想を利用したのである。主体思想は超国家的統合に反対するが、これは中国の「ソ連覇権主義」批判と大変よく似ている。このためソ連は、ある国が主体思想を容認する準備があるか拒否するかが、クレムリンに対する忠誠心を計るリトマス試験紙であると結論づけたのである。例えば、ユーゴスラヴィアとポルポト時代のカンボジアは主体思想への賞賛を表明したが、その一方で、親ソ連のモンゴル、キューバそしてヴェトナムの指導者たちは慎重に無視し、時には批判した。これまでのところキューバは、自分たちの「キューバの事情に適合させたマルクス＝レーニン主義」と主体思想を、具体的に区別している。

しかし、主体思想を全体としては外交目的の選択的な使用から区別するのであれば、マイアースのように、「主体思想が海外に対する政治的勢力となったことを意味しない」（一三三頁）ということもできる。特に、海外に作られた主体思想研究会はその国の問題に対する関心

を、あったとしてもわずかししか払わなかった代わりに、はるかに離れた朝鮮半島の問題に焦点を当てたのである。この点で主体思想は、毛沢東思想がペルー、フィリピン、ネパールそしてインドの武装勢力に、中国の指導者が放棄した後であつても長きにわたつて影響を与え続けたことは鮮やかな対比をなしている。

部分的な例外は、韓国の学生運動の自民闘派（一九八七年に盧泰愚韓国大統領が民主化を宣言した後、学生運動の中で登場した主体思想を支持するグループ。反米自主化反ファッショ民主化闘争委員会）自民闘と名乗り、多くの大学の学生自治会執行部を掌握した」の中でわずかな間、主体思想が認知されていたことだが、マイアースの言うように、「反米主義としての北朝鮮賛美」であり、「独裁者の思惑に有利に働いたが、その逆ではなかった」（一七二頁）。

同時に、主体思想が北朝鮮の政策決定における実質的な指針となつたわけでもなかった。北朝鮮自身の主体思想研究所は、国外で類似の組織が作られたよりも

ずっと後になつて創設された（一五二頁）のであり、主体思想の原則は明らかに対内的ではなく対外的なプロパガンダとして存在意義があつた。イデオロギーが、異なる状況に対して改めて解釈され、創造的に適用される、抽象的な思想と一体化したものとして定義されるのであれば、「キム・イルソン」キム・ジョンイル主義」のみに関して見ても、主体思想がこれまで純粋なイデオロギーだったのか否かは確かに疑問である。主体思想が、イデオロギー的な力を示すよりも単にプロパガンダの道具として作用したことを明らかにする特徴として、マイアースは、主体思想をマルクス主義や毛沢東主義と区別する主体に関する理論的な議論の欠如が「教義に関する議論が純粋培養されたごまかしであることを示すもう一つの例」（一五四頁）と強調しているが、適切である。

マイアースは、主体思想の中心的なスローガンである「人間が全ての事の人」を、北朝鮮が理論的に発明したので、アジアの文化的伝統に特有の考え方も、

でもない指摘する。彼はこの原則をスターリン主義と毛沢東主義が「自発性を誇張」（二五頁）することに比喩するが、これは、この概念のイデオロギー的な起源であるだけでなく、ソ連の外交官がこれについて保留したことの説明を助ける洞察力のある見解である。このスローガンの起源は、生産を拡大する上で政治活動が他の要素よりも重要だとキム・イルソンが宣言した一九六〇年まで遡ることができる。これは、物質的なインセンティブがイデオロギーに従属することを暗示する声明であることから、一九五三年より後のソ連の政策の変形というよりも、毛沢東主義に準拠していることが明らかである。

マイアースによれば、北朝鮮が永続的に援助に依存していることも、主体思想が呼びかける「自立経済」に欺瞞をもたらした。マイアースは、この体制の「自閉症的な傾向」（三三頁）を認識しながら、朝鮮労働党指導者たちは真剣に外国の援助を先取りするつもりはなかったと結論づけている。マイアースが適切に指

摘しているように、「自力更正」（中国語の「自力更正」に基づく用語）のスターガンは、しばしば誤って「自立」と解釈されてきた（一九頁）。しかしそれでも、マイアースが考えているよりも、プロバガンダと実際の政策決定の間の区別は明確ではない。事実、北朝鮮の援助依存はその自閉症的傾向と相互に強く関係していた。輸出志向の工業化に対して指導者の輸入品嗜好が貿易赤字を永続させ、そのため一方的に援助を求めるピョニヤンの習慣が強まったのである。

一九九〇年代半ば以降、自閉症的計画経済の崩壊、新たな「先軍」概念の影響、そして人種的民族主義の明らかなる表面化により、マルクス主義も主体思想も北朝鮮体制において中心的な役割を演じていない。マイアースが指摘しているように、かつて主体思想の勃興を刺激した対外的国内的要因の大半は、もはや機能していない。このような状況では、現在の国の支配者であるキム・ジョンウンにとって主体思想は正当性を示す主要な要因ではない。ある点では、このような傾

向は一九九〇年代以降の中国の政治プロバガンダに比較できる。中華人民共和国の経済政策はもはやマルクスレーニン主義ではなく、新たなイデオロギー的な正当性が求められていた共産党指導部は、それを国家民族主義に見いだしたからである。

全体的に見て本書は、主体思想に関する哲学的内実、政治的文脈そして歴史的变化に関する新鮮な視点を提供している。関連する事実情報の膨大な積み重ねに加えて、本書は、方法論の領域においても示唆に富む。マイアースが指摘しているように、現実の北朝鮮分析を試みるのであれば、主体思想に関するパンフレットやキム・イルソンの演説集の分析は、単なる表面的な観察以上のものを提供する可能性は低い。そのような出版物の多くは、部分的には、外国の読者に影響を与えることを意図していることに加えて、常に意識的に曖昧で、同じことの繰り返しだからである。毎日新聞の記者に対するキム・イルソンの言葉、「主体思想の理解を深めれば、我が党の政策を

詳細に研究することが必要になる」を言い換えれば、北朝鮮政策を理解する方法は、主体思想の詳細を研究することではなく、体制内プロバガンダとその具体的な行動の分析なのである。